

化粧文化史の変遷と流行した化粧の受け入れ方についての研究

玉置育子、横川公子

武庫川女子大学大学院 家政学研究科

本研究では、近代的化粧の形成と現代における化粧に対する意識調査を行った。

近代的化粧の形成を追う際には、当時美容家と称された美容に携わる人々の活動に注目した。美容家は明治30年頃に登場し、西洋の美容術—フェイスマッサージを日本に紹介し、美容家が経営する美容院や講習会で西洋的美容術を普及させようとした。また、近代的化粧の根底には、傷跡などを薬で治療した後、化粧で目立たなくしようとする西洋医学という思想が根底にあり続けた。しかし、西洋医学は昭和30年代に制定された薬事法、理・美容師法によって終焉を余儀なくされた。

次に、現在における化粧に対する意識調査はアンケート調査を行った。

調査結果として、10、20歳代の女性には化粧に関する情報や化粧法の差は見られなかったが、30歳代を転換点として化粧に関する情報や化粧法に変化が見られた。また、多くの女性が最も気を使う化粧として目元を述べていた。特に現在、10歳代の女性は目元を強調しようとする傾向が強く、化粧ポーチの所持品率で最も高かったのはマスカラであった。